



地域日本語支援ニュース こだま 第 403 号

2021.6.10



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

====目次=====

1■AJALT からのお知らせ (1) ■

機関誌『AJALT』44号発行に寄せて

2■AJALT からのお知らせ (2) ■

オンライングループレッスン (AJALT) 開講のご案内

3■本国情勢を踏まえた在留ミャンマー人への緊急避難措置(出入国在留管理庁)について■

=====

1■AJALT からのお知らせ (1) ■

本日刊行！

機関誌『AJALT』44号発行に寄せて

編集長 河原 栄

『AJALT』は年に1回、当協会の教師会員によって編集・発行されている機関誌です。長引くコロナ禍により編集作業もさまざまな制約を受けましたが、今年も無事発行することができました。「こだま」前号で『AJALT』44号の内容について概略をお知らせいたしましたので、今号では編集方針、特徴そして発行に至るまでのエピソードをいくつかご紹介したいと思います。

◆今号の編集方針と特徴

今号の編集に際しては、記事の基本構成は従来と大きくは変わりませんが、レイアウトやデザインを一新し、より読みやすい誌面作りを心掛けました。そして、今号の最大の特徴は一部とは言え創刊以来はじめて記事のカラー化を実現したことです。前半の16ページ分ですが、ページを開くと、今までにない鮮やかな誌面が目飛び込んでくることでしょう。

◆特集について

『AJALT』44号の特集テーマは「文語の力再発見ー表現のスパイス」と題し、現代日本語の中に残っている古典的・文語的表現を取り上げました。個人的には、テレビのバラエティー番組などで毎日のように聞こえてくる「～と思いきや」の用法に興味を持ったからでした。古い言葉はいずれ消滅する運命にあるのかもしれませんが、残るものには残るだけの理由があるはずです。そのことを考えることも現代日本語を理解する上では大事なことではないかと思った次第です。

◆巻頭インタビュー 「私とことば」

44号の巻頭インタビュー「私とことば」には俳人の黛まどか氏にご登場いただきました。インタビューのお願いを打診したのは御父君で俳人の黛執氏を亡くされたばかりの頃でした。コロナによる制約もあり、実現は難しいかなとも思いましたが、幸いお引き受けいただけることになりました。ただ、それからが大変でした。氏は静岡県ご在住で、東京においでになるついでと、緊急事態宣言解除という、今から思えば、台風の晴れ間のような時期を見計らったインタビューでした。当初はしゃれたレストランの一室でなどと画策したのですが、どこも予約を受け付けてくれる状況ではなく、万策尽きて、結局弊協会事務所においでいただくことになりました。殺風景な事務所の一室を、急遽編集委員の手でできる限りのセッティングをしてお迎えしたのですが、氏は快くインタビューに応じてくださり、インタビューの内容ともども一同あらためてそのお人柄に感激しました。詳しくはぜひ本誌記事をご覧ください。

◆カイロ大学 菊地真先生

先生が『日本語学習者のための日本古典入門』（学術研究出版 2020）を上梓

されたという情報を前編集委員から聞き、これは今号の特集で取り上げる文語との関連でぜひご寄稿をお願いしたいと、カイロ在住の先生にメールを差し上げたのが11月の上旬でした。当然リモートでのやりとりを覚悟していたのですが、先生はすぐご快諾くださり、かつ1月には一時帰国するからAJALT事務所を訪ねてもよいというお言葉をいただきました。そして1月末、ご帰国後2週間の自宅待機を終えてカイロにお戻りになるまでの貴重なお時間を割いて事務所においでいただきました。場所はすぐお分かりになりましたかとお尋ねしたところ、実はこの近くの高校を卒業されており、AJALT事務所がある神谷町は毎日通っていたとのこと、不思議なご縁を感じました。

◆旧忍（おし）藩16代当主松平忠昌氏

氏が会長をされている公益財団法人「忍郷友会（おしごうゆうかい）」は埼玉県行田市を拠点にさまざまな活動をされています。その活動のひとつとして、子ども向けの論語、漢詩などの素読教室を運営されていると聞き、今号の特集テーマ「文語」、そして繰り返し音読するという学習方法が日本語教育ともつながるということから、インタビューをお願いしました。ご快諾をいただいたものの、緊急事態宣言によりインタビューの目途がなかなか立たず、ようやく1月下旬になってインタビューができることになりました。当初は氏が会員であり、また弊協会も毎年交流会の会場としてお世話になっている霞ヶ関の霞会館でのインタビューを予定していたのですが、こちらもコロナの影響により部外者の立ち入りは禁止ということで実現できず、結局、氏にも弊協会事務所においでいただきインタビューをさせていただきました。

旧忍藩というのは現在の埼玉県行田市にあり、小説や映画で有名になった『のぼうの城』の舞台になったところです。ただ、氏の先祖は小説・映画に出てくる忍城城代「成田長親」とは関係がなく、遠く徳川家康の長女亀姫と奥平信昌の第四子、松平忠明を家祖とする家柄だそうです。由緒正しき方へのインタビューは担当の編集委員にとって得難い経験となりました。

◆デジタル技術でアナログな紙の本を作る

コロナ禍以前は入稿から校了までゲラ（試し刷り）に赤ペンで修正を入れて、初校、再校と印刷会社との間で紙のやりとりをしていました。今は、事実上そのようなアナログ的な作業が不可能になり、必然的にほとんどすべての作業がデジタルで行われるようになりました。最初はとまどいも、まちがいもありましたが、ようやくそれにも慣れてきました。いっそ『AJALT』誌そのものも電

子化したらどうかという意見もあるようですが、私たちは1年に一度とは言え、これからも紙でお届けする機関誌の感触をぜひ味わっていただきたいと考えています。

★機関誌『AJALT』44号は、当協会HPよりご購入いただけます。

定価 880 円（本体 800 円）+送料

<https://www.ajalt.org/about/bulletin/>
